

明治の表現力

——矢野龍溪「両文体」論に関する一考察——

和田 佐規子

はじめに

谷川恵一氏の論文「小説のすがた」(『江戸文学』21、一九九九年)によると、明治初期の小説は、漢文・漢字カタカナ交り文・漢字ひらがな交り文という三つのスタイルを持つていたが、明治二〇年ごろを境として、前二者はほとんど姿を消すという。^(一)そして、矢野龍溪(嘉永三年〜昭和六年へ一八五〇〜一九三二)が『日本文体文字新論』の中で「両文体」と名づけたものは、ひらがな交り文で書かれた小説の、ほとんどすべての漢字の右側に振り仮名が添えられるというスタイルを継承するものとする。^(二)

ところが、龍溪の『日本文体文字新論』は、その第三章で小説などを「文學書」として公文書などの「普通書」に対置させておいてから、「普通書」に対して両文体を採用すること

とを論じており、この点において、谷川論文が「小説」という前提に立つてその表記を論じていることと、意味合いが異なることは少々注意を要する。ただ、龍溪の「両文体」が江戸稗史小説などにみられた表記、特にその機能に着目したものであったことは言うまでもないし、実際、「小説」というジャンルがまだ新しい時代においては、谷川氏の「小説」の表記についての記述は、龍溪の時代の表記一般に対して適用することもできるだろう。

矢野龍溪は『日本文体文字新論』の中で当時行われていた文体を四つに分類し、そのなかでも漢字仮名交り文の漢字に振り仮名を付した「両文体」の長所をあげて、将来の日本語の理想の姿としている。以下、『日本文体文字新論』における矢野龍溪の文体論について、そこで提唱された「両文体」が実際にはどのようなものであったのかを中心に考察を試みたい。テキストは矢野文雄著『日本文体文字新論』(報知社、

明治一九年）に拠った。

なお、本稿では引用文の漢字表記はできる限り原書中の表記に従った。しかし、龍溪は表紙の書名表記では「日本文體文字新論」としているものの、本文中でこの書名に言及する場合に「日本文体文字新論」と新字の「体」を用い、本文中でも、たとえば「文体」など新字の「体」で通しているのも、それに倣って書名は『日本文体文字新論』とし、本文からの引用中は原書通りという原則に従って「体」とした。なお、他の文献も書名については新字で表記するが、引用文についてはできる限り引用する原書中の表記に従うこととする。

新文体創出の意図

本書の自序はロンドン滞在中の明治一八年十一月、発行は翌一九年三月である。『斎武士士／経国美談』（明治一六年、以下では『経国美談』と略記する）出版（明治一七年二月）の二ヶ月後、龍溪は文物視察のために渡欧し、帰国まで滞英二年半、その間にこの『日本文体文字新論』は執筆されている。これが日本で出版されたのは、国内で国字問題が盛んに論議されている頃のことであった。^三龍溪はその自序の冒頭で、「文字文体ハ國人ノ知識ヲ廣ムルニ大切ノ者」、また第一章でも「日本ニ於テ如何ナル文字文体ヲ用ヒバ國人ノ知識ヲ進ム

ルニ最モ利益多カルベキヤ」（二丁）と述べて、文字文体を論じることの意義を明らかにしている。

自序によると、はじめは帰国後にまとめるつもりで、海外の文字文体について見聞した内容を彼の欧州視察の記録『周遊雜記』中にメモしていたというが、日本から送られてくる新聞などから、日本国内で文字文体について盛んに議論が行われている様子を知り、自分の考えもこの機を逃さずに発表しようと思ったという。弟の武雄がロンドンに来ているのを幸いに、彼に口述筆記させ、手直した原稿を一五年から社長に就任していた報知社へ送って出版するという方法を取った。

本書の全体の構成は目録によると次の通りである。

第一章 語体語勢ノ事

第二章 文語及ヒ文体ノ事

第三章 日本ニ用フ可キ文字及ヒ文体ノ事

第四章 假名ト漢字トノ優劣

第五章 日本ノ假名ト羅馬字トノ優劣

第六章 全篇ノ要領及ヒ補遺

第一章、第二章、第三章、および第六章は主に文体について述べ、先の意図に最も合致する文体は何であるかを詳論する。具体的に三千字漢字節限論を提唱し、その具体案も提案している。第四章と第五章では仮名、漢字、ローマ字の優劣

を論じ、日本語には音節文字の仮名が適當であると結論付ける。

以上が本書の概要であるが、口述筆記という方法を取ったせいか、文中には必要以上に繰り返しがあつたり、章の途中でそこまでの要約が挿入されたりして、論理の明晰さを自ら阻害してしまつてゐる感もある。また言及する例文の番号が明らかに違つてゐる個所も見られる（九丁、二十四丁）。国内での文体論議の高まりに煽られて、時流に乗り遅れまいとするジャーナリスト魂が働いて、あるいは出版を急いだのかもしれない。

しかし、『経国美談』後編自序中の「文體論」に記された彼自身の言葉を借りれば、「次第二類雜ニ赴キ次第二精密ニ赴ク我が社會ニ適合スベキ、一種ノ新体ヲ生出シ来ルベキ時運ナリ」と考へており、新文体形成への意欲はこの『日本文体文字新論』以前より温めていたものであつたことがわかる。すでに明治一六年の段階で、龍溪は「是ヨリ以後復タ漢文ヲ以テ時文ヲ褒貶スルヲヤメ、努メテ完全ナル時文ヲ作ラント、欲スルノ志ヲ生ジタリ」と述べてゐるのである。この「文體論」によると龍溪が『経国美談』前篇・後篇で採用したとする文体は、当時通用の文体四種である「漢文體」、「和文體」、「歐文直譯體」、「俗語俚言體」を兼用したものであつた。

ただ、龍溪が『経国美談』後編自序中の「文體論」で語つ

ていた新しい試みは、小説上の文章についてのものであつたのに対し、『日本文体文字新論』では「普通書」に用いる文字文体として「両文体」を考えていた（第三章）。

これら二つの著作において、文体の分類の名称に違いはあるが、維新以来一七年間の文体について、「唯達意ヲ主トシ、新奇ヲ競ヒ、漢文ノ格ニ入ラズ、和文ノ例ニ依ラズ、實ニ放縱不法ヲ極ムルガ如シ」という危機感を抱いてゐたことは間違いない。それが、彼をして「一種ノ新体」の創出を目指させたのである。

以下では、『日本文体文字新論』の内容を論文の組み立てに沿つて見ていくことにしたい。

一 音韻論——第一章 語体語勢ノ事

この章の冒頭に挙げられた「日本ニ於テ如何ナル文字文体ヲ用ヒバ國人ノ知識ヲ進ムルニ最モ利益多カルヘキヤ」（一丁）という関心は、すでに文字文体を論じることの意義として引用した。この西洋知識を広めるための道具としての言語観は到る所に顔を出す。この章では「如何ナル語体語勢ガ最モ日本人ノ口ニ都合ヨキヤ（発音ニ便利ナルヤ）」と、音韻論を展開するのであるが、「言語ハ成ルヘク少ナク口ヲ動カシテ、成ルヘク多クノ意味ヲ言ヒ得ルヲ最上ノモノトシ多

クヲ勞シテ僅カノ意味ヲ言フヲ下等ノ者トス」(十三丁)を一般論として、発音上の都合の良さ、便利さをもつて日本語の音韻を論じていく。何に対する都合の良さ、便利さかといえは、言うまでもなく「人民ノ知識ヲ廣ムル」(三六丁)目的に対する評価である。

しかしここでは結局言語間に優劣をつけているわけで、その基準として「聲」^(一〇)の数は少ないほうが上等で、また語勢すなわち勢い(たとえば「ヒトスズ、ニ、進ム」では「勢」抜ケテ甚タ鈍シ」故に「イッチヨクセン、ニ、進ム」のほうが良いとする)がある方が良いのだと主張する(二十五丁)。最上等に對し下等というように、言語間に「等級」をつけており、別の個所では野蛮未開の部落の言語には短声がないものもあると述べ、「文化ノ國」との対比を行つてゐる(三十二丁)。また、「文學上ノ言語(則チ文語)」(三十五丁)に對して「日用ノ語」は絶えず変化していくが、それは不便を去つて便利へ向かうという。ここには未開から文明へ、また不便から便利へと二重になつた文明觀が透けて見える。

言語の理として、人間の口は言語を短縮することを好む。言語は便利の方に進化する。したがつて、漢語の「短声」^(二二)「急声」^(二三)を捨てて「平長ノ聲」^(二四)のみの「我が土語」^(二五)すなわち純粹な日本語の語彙だけをを用いようとすることは理屈に合わないとするのがこの章の主張の中心である。「我が土語」だ

けを用いさせようとすることは、つまり、「口ニ便ナル短聲急聲ヲ棄テ只平聲ノミヲ用ヒシメント欲セバ是レ言語ノ理ニ悖ルノ甚シキ者ニシテ當ニ日用言語ノ不便ヲ來タスノミナラス其ノ不便ヲ文學上ニモ及ホシ文學上ノ不便ハ人民ニ知識ヲアタフルノ障ケ」(三十五、三十六丁)となるから、普通の談話をそのまま仮名で綴つて文章にするとしても漢字・漢語を廃すようなことはしてはならない(三十九丁)とはつきりと主張している。「土語ニ漢語ヲ雜ヘサルヲ得サルノ一事」(三十九丁)は第三章での龍溪の主張の前提を成すと言う。

II 文語文体の利点——第二章 文語及ヒ文体ノ事

「常語」(四十三丁)で「日常の言語」と略記するとしたに對して「文語」と龍溪は言う。「文學上ノ語」(五十丁)とも呼ぶ。目に見ると耳に聞くとともに大いに差のある働き(五十二丁)であると述べた後、「文語」は「目ノ爲メニ存セシ」体だとし、他方「常語」は「口ノ爲メニ生シタ」体とした(四十九丁)。目で読む文章には常語(口語)、常語体(口語体)よりも「語勢短ク如何ニ緩々ト之ヲ見ルモ一氣ニ心ニ解シ易キ」(五十一丁)文語、文語体の方が適當だと言ふ。その論拠としてあげてゐるのは以下の点である。

① 常語は文章に書くとき長くなるが、文語は形が短くて、

一気にその意味をつかみやすい。

- ② 常語には「貴賤尊卑ノ等級ヲ各句ノ語尾ニ付スル」(五十七丁)のに対して、文語にはその辞に等級がない。

- ③ 常語には態度や音声の高低緩急の助けがある。これに対し態度や語勢の助けがない文章を書くにあたっては、意味を面白く、また分明に感じさせるための工夫が必要である。

- ④ 常語には「畧語」(各地の方言)があり、「正語」を知らない者が多いので、「正語」「正体」を学ぶ必要がある。

「知識ヲ擴ムルノ手段ハ書物ニ勝レルモノ無」(六十八丁)く、文章は必要の道具であり、「知識ヲ衆人ニ傳ルニ當タリ読者ヲシテ其ノ心ヲ勞スルコト尠ナク知ル可キ事柄ヲ早ク容易ニ吞込マシムルノ藝術」(六十七丁)であるから、④により、同じ手間をかけるのなら文語・文語体を学ぶ方が便利であると論を急ぐ。しかもこれを学ぶことは難しくないと言う(七十三丁)。

第一章、第二章の要旨をまとめた上で、支那音も文語・文語体も使って文章を作ることには、仮名文字論者も多くは自分と同じ意見であるようで、ただそれをどのような文字で書くかというところで仮名文字論者とは意見を異にするのである。

るから、次は用字論、すなわち、「常語文語ヲ雜ヘテ作り出タセル文章」にはどのような文字が便利かを論じていくことにする(七十四丁)と、筆者は第三章への発展を示す。

龍溪は言文一致に反対だったとされる。基本的には談話と文章とは耳に聞かせるのと、目で読ませるのとで、それぞれ便利な文体が違い、談話をそのまま文章にするのは不都合であるとしている。そして、常語が「文章ニ入り難キ」「妨碍」(五十七丁)として龍溪が挙げている諸点(上記①～④)は、実は当時の言文一致運動の「妨碍」として、乗り越えていくべき問題の提示となつていることはもちろん偶然ではない。

しかし、正確には言文一致についての詳しい議論は避けているように思われる。「常語文語ヲ雜ヘテ作り出タセル文章」(七十四丁)という表現で、折衷的な態度をのぞかせている。言文を一致させるべきかどうかの議論の前に、文字をどうするかの方が、より大きな問題として認識されているのである。上述のように、第二章の終わり(七十四丁)で第三章への前提としてこれまでの要約をする際に、「常語文語ヲ雜ヘテ作り出タセル文章ヲ書クニハ如何ナル文字ヲ用ヒハ最モ便益多カル可キヤ」を次章での問題とし、常語と文語を混ぜること自体はすでにあって良いこととしている。無論、自分の理想とする文体に使うかということは別問題であらうが、第一章

でも「今、平日ノ談話ヲ其ノ儘、假名ニテ綴リ之ヲ文章ト爲スモ決シテ漢語ヲ廢シ得ヘキ者ニアラス」(三十九丁)と述べて、談話(會話)をそのまま文章にすること自体は問題にしていなかった。用字論の議論を急ぐその態度は、第三章でも述べるが、「普通書」「文學書」をわけて、「普通書」のみの、文字削減と文体の改良を主張していることの中にも見られる。

言文一致運動は論文、小新聞の振り仮名付きの談話体などで早くから注目されたが、文学的表現としての創造性の一つとして言文一致が求められた文学、特に小説の分野でより大きなうねりとなった。^(二九)これに対し、龍溪においては、明治十年代中ごろから盛んになっていた国字問題、文字文章改良の議論の方に大きな関心を寄せているのである。言文一致の議論、すなわち談話体で文章を書くことの是非は、龍溪においては、いずれの文章が新知識を国民に広げていくことに貢献するのかわきという問題意識の中に吸収されていたといえるのではないだろうか。

III 公文書の文字・文体

—— 第三章 日本二用フ可キ文字及ヒ文体ノ事

龍溪は仮名文字論に対する危惧を表出することから本章の

論述を始める。学びにくい漢字を全廃して仮名文のみを使うという仮名文字論は、一度世に出てしまうとすぐに広まり、漢字を廃止することになってしまふのではないかと思われると言う。しかし、仮名文論は実際には根柢不足であると断じる。そして、今日までに現れてきた文体を五種^(三〇)挙げ、それぞれの特徴と来歴を比較、解説した後、漢字仮名交り文の漢字に振り仮名を付した「両文体ハ最上便利ノ者」であるから「日本普通ノ文体」とすれば、不都合なことは何もないと主張する。両文体は学びやすさは仮名体と同じで、見やすさは仮名体より優れている。また見やすさは雑文体と同じでありながら、学びやすさは雑文体を越えることを論証していく。その上で、両文体の普及のためには漢字節減が必要であるとして、まず文章を「普通書」(政府の布告、教科書、新聞紙、日用の手紙など)と「文學書」(小説類、高尚専門の論文、専門書類、史類伝記)二種類に区別して、そのうちの普通書に限りて文字を節減するという。このようにして普通書に用いる文字の数を節減した上で、両文体を「公書体」にする(百十四丁)ことを主張の中心とした。これがこの章の概要である。

ここで要領良くまとめられた日本語表記の歴史は、すなわち当時の表記の多様性を示すものでもあった。日本の言語は漢文体から、漢文変体、雑文体、両文体、仮名体と、それぞ

れが並存する形で、長い年月の間に変貌を遂げてきていた。このように用途別に表記体系を持っていることは、当時の日本語表記上の重要な前提であつた。そして、歴史の転換点を迎えた日本が、新知識をいかに学び、いかに多くの人に伝達していくかという明治の大課題に直面した時、多様な、つまり複数ある表記体系を整理していく必要に迫られたのである。この時、龍溪の関心は公文書を含む普通書に向く。それは新知識を一般の国民に広げていくための手段としての言語という立場をとっているからに他ならない。彼の分類上、誰にでも読めて広く世間に通用する目的の「普通書」に対し、教育を十分に受けた世界に向けて読ませる文章としての「文學書」については、どんな文字文体でも良いとしている^(二二)。この分類上の「普通書」については文字を常用の漢字に制限することを必須としているが、「文學書」については、著者が広く世人に広める目的の書物ならば常用の漢字のみを使用し、その結果「普通書」に分類されることもあるというのみで、基本的に「文學書」はここで龍溪の眼中にはない^(二三)。用途別、使い手別に複数あつた日本語の表記体系を、新たな目的のもとに区切り直す、その目的とは、新知識を広めるといふ明治近代化の新機軸と一致するものであつたことは言うまでもない。

IV 「両文体」とは何か

彼が「最上便利ノ者」と推奨する「両文体」の内容について更にくわしく見ることにする。

「両文体」の前提としてまず「雑文体」がある。漢文及び漢文変体では、一行の文章を読むのに何度も行きつ戻りつ顛倒読みするが、これは「無益ノ骨折」(七十八丁)で、これに対し「雑文体」は「口ニ讀ム語法ノ順序ヲ其儘ニ書キ下タシ其ノ間處々ニ假名ヲ夾ミタルモノ」(七十九丁)であつた。公文書ではここ二十数年盛んに使用されるようになっていたが、その萌芽は六、七百年前で、「平家物語」や「太平記」もこの体で記されている。戦乱で一時衰えたが、徳川時代に再び隆盛になる。「日本ノ文運ノ一大進歩」であり、「國人ニ知識ヲ廣ムルノ便利ハ此時ヨリ幾十倍ニ増加シタリ」(七十九丁)と高い評価を与えている。そしてこれはすでに多くの人が認めている所であるとする。また幕末に洋書を訳すことが盛んに行われるようになった時にも、この雑文体がすでに広く行われていて、地歩ができていたため、訳者、訳書を読む人、漢書を読んで国事に携わる人それぞれに便利な雑文体が使用され、公文書の文体となつたのであつた(八十丁)。「両文体」はこの雑文体の漢字に仮名をつけたもので、「假名文トシテモ之ヲ讀ミ得可ク又雑文体トシテモ之ヲ讀ミ得可

ク」漢字を知らない人には仮名文として通用し、漢字を知っている人には雑文体として読めるものである。最も盛んになったのは徳川最盛期、寛政天保の頃の神史小説などであった。維新後の「假名讀ミ新聞」で盛んに世の中に使用されるようになった。

漢字より仮名のほうが学びやすいのに、仮名体が一般に使用されないのはなぜか。それは当時「両文体」がすでに存在したからである。これがあつたために仮名体が一般に通用することは無かつたのである。「両文体ハ假名体ト漢字体トヲ兼ネタルモノニテ甲ニ對シテハ假名体ト爲リテ適用シ乙ニ對シテハ雜文体ト爲リテ通用シ同シ一人ノ身ニ取リテモ始メハ假名体ト見エ後ニハ雜文体ト見ユ」(八十四―八十五丁)と龍溪はその機能を述べる。雑文体と仮名体のどちらが読むのに便利かというと、雑文体の方である。雑文体の唯一の欠点は漢字が学びにくいことであるが、両文体なら、まず仮名体から読み始め、次第に読むことのできる漢字を増やしていく、そのうちに目で見えてわかりやすい漢字のほうを読んで文全体が読めるようになるという、段階的な学習機能を兼ね備えた文体であることを指摘している。

両文体が仮名体よりも優れているもう一つの側面を論ずるために、音韻論に再び触れる。仮名体では、日本人の発音上「同聲異義」(九十丁)となつてしまう語の多い漢語は知らず

知らずのうちに避けられて、土語だけを使うことになる。この点は仮名文だけでなく「羅馬字文ヲ試ミタル人々ハ定メテ斯ノ如キ有様ヲ經驗シタル可シ」(八十七丁)。しかしながら、第一章で論じた如く、土語は平たく長くなるので不便なのである。このようにして仮名体への警戒と同時に同じ音字である羅馬字体をも牽制している。また同時に、すでに第一章で漢語、漢字廃止論への異議を述べていたことからすると(三十九丁)、両文体の漢語に付する振り仮名に「クニコトバ」を使わない方向を打ち出していると読み取れる。幕末・明治初年以來、法令や記録、判決文などにも、左訓としてその漢語の意味や、それに当たる和語を振る表記方式が盛んに行われてきていたが、龍溪にとつて振り仮名の意義は漢語の字音、すなわちその発音の仕方を振ることであつた。

龍溪は漢字廃止論には絶対反対であつた。漢語を使えば、クニコトバによるよりも短い文で必要な情報を伝達できると、漢語の便利さを称えてきた。^(三三)しかし、それは語彙レベルでの議論だつたのだろうか。それとも、二十五丁で用いられた用語を使つて言えば「辞」のレベルまで含めての議論だつたのか。この点が曖昧になつていゝのではないか。

つまり、雑文体、あるいはその漢字部分に振り仮名をつけた両文体では、仮名で書かれた部分はどのような文体であつたのか。とくに、今後公用文書に使用を進めようとしている

両文体は、仮名部分の、つまり、全体の文体としてはどのような構造を持ったものを想定していたのか。漢字と支那音を龍溪の理想の文章、文体の中に残すということは第一章、第二章からの当然の帰結であろうが、彼の言う「文語」、あるいは「文學上ノ語」というものは、いわゆる漢文訓読体のことなのであろうか。

雑文体は幕末に洋書を訳することが盛んに行われるようになった時、便利に使用され、「漢文ニ近ク且ツ甚タ便利」で、「公書ノ体」となったと述べる（第三章八十丁）。すでに引用したが七十九丁に「口ニ讀ム語法ノ順序ヲ其儘ニ書キ下タシ其ノ間處々ニ假名ヲ夾ミタルモノ」と定義らしい表現をしている。一方で、「我邦ノ文語ノ中ニハ今日ノ常語ヨリ甚シク隔リタル一種ノモノアリ」（第二章六十三丁）、それを、第二章では「最簡文語・最簡文体」（六十三丁）と呼んでいる。これは漢文を訳読するのに始まったもので、「世人カ顛倒法ヲ用ヒテ支那書ヲ讀ムハ則チ日本ノ語法」（六十五丁）である。「支那文字カ非常ナル大勢力ヲ振ルヒシニモ拘ハラス日本ノ語法ハ文學上ニ於テスラ其ノ滅亡ヲ免レテ遂ニ後世ニ傳ハリ」（六十四丁）、「近來二三十年ニ至リテハ遂ニ漢文ヲ壓倒スルノ勢」（六十五丁）となった語法である。「漢文ノ譯讀」またその等価値の語として「漢文ノ訓讀」（六十五丁）という語を挙げているから、漢文訓読体のことを指すように理解

できる。それは七十九丁の「口ニ讀ム語法ノ順序ヲ其儘ニ書キ下タシ其ノ間處々ニ假名ヲ夾ミタルモノ」という説明からすれば「雑文体」なのであろう。ところが、仮名体の解説で「源氏物語」、「伊勢物語」、「竹取物語」、「土佐日記」などを例に挙げた後、「雑文体ニテ書キタルモアリ」としているが、ここでの「雑文体」とは漢文訓読体のことではなく、漢字と仮名の単なる雑ぜ書きのことをさしている。また、龍溪が、雑文体の手本として、振り仮名をつければ両文体の手本として、両者に有効であると考えた近世の文筆家として、新井白石と貝原益軒の二人を挙げている（百十一丁）が、彼らの文章は狭い意味の漢文訓読体ではない。^(四)簡潔な漢文訓読文のことを、「最簡文体」「最簡文語」と名づけているようにも思われる。第二章以降の章を読み進む時、「両文体」、ひいてはその基礎であるところの「雑文体」で使用すべき文体について、すっきりと整理されていない感がある。「最簡文体」「最簡文語」について後の章で述べるはずであったが（第二章七十三丁）、特にこれ以上の言及もない。

ここで、第六章を先取りしよう。龍溪は第三章で「雑文体」と呼ばれている文体、すなわち両文体の前提になる文体のうちから、龍溪が普通書に採用することを推奨する文体を、更にこの第六章で狭く定義していく。ここで初めて雑文体の種類を大きく三つに分けて、その一つに「漢譯体」という語を

用いて、「洋譯体」「土語体」に対比させている。さらに、普通書に使用することを提案しているのは結局は「土語体」であつて、この「漢譯体」ではないと、龍溪ははっきりと述べている。この「漢譯体」の用語は六章以外の章では一度も使用していないが、仮名を省いて文字を顛倒すると正格の漢文となる文体のことであるとする。とすれば、「漢譯体」とはいわゆる「漢文訓読体」をさすのであり、普通書に使用することを龍溪が提案しているのは漢文訓読体ではないということになる。

第三章に戻る。特に注目したいのは、八十四丁で何度目かの両文体の定義を繰り返すのにあたり、「両文体ハ假名体ト漢字体トヲ兼ネタルモノニシテ」と「漢字体」という用語を使っている点である。これは「漢文体」あるいは「漢譯体」の誤りではありえない。それ以下の文章や他の個所との比較においても「雑文体」とすべき所を、「漢字体」と言つてしまつているところには、単純なミスや誤植以上の、龍溪における関心の比重を見ることができよう。すなわち、雑文体の最重要ポイントは、漢字を用いた文体という点に存すると言わざるを得ないのである。雑文体の漢字以外の部分、つまり仮名で書く部分を中心とする文章構造についての説明に曖昧さが出るのは、ここに原因があるのではないだろうか。

龍溪が「普通書」で採用しようとしたのは、表記上は雑文

体を基礎とした両文体で、第二章の結論からすれば、それは常語よりも簡潔な文語文ということになる。結局漢字仮名交りで書かれていて、しかし談話体とは違う、かつ、漢文訓読体ではないが、それに近い漢字漢語を用いた簡潔な文章であるというくらいに、曖昧で、折衷的な文体であつたのではないか。この意味で、龍溪は明らかに非言文一致論者だったのである。

龍溪は具体的な施策を提案している（百五丁以下）。政府の布告である必要はないが、政府自身が率先して実行することを求める。まず「文部省ノ學士會院」から選んだ学者三名に常用の漢字三千字を八万字の中から選ばせる。続いて、各省庁役所などに対して、この常用の漢字を主に用いるように令達し、全国の学校にこの常用漢字だけを「教課書」に使うように命令する。官府の文書、学校で用いる教科書の文体は両文体にし、ほとんどの漢字には振り仮名を付けさせる。こうして、普通書の字数を定めた後、字引を作るのである。両文体の手本として、上品で人物的にも慕わしい文章を残した新井白石と、平易で温厚篤実な文章を書いた貝原益軒を手本として挙げたことは、すでに述べた。両文体がその前提として必要とした漢字削減（漢字三千字）は失敗に終わったと言われるが、その後の当用漢字制定への布石となつたことは間違いない。

V 仮名文字と羅馬字への牽制——第四章・第五章

第一章では言語学上からみた「語体語勢」について、続く第二章で、「視感聴感」から文語文体の利点を論じた。さらに、第三章は文体の沿革を概観した上で、公文書に用いるべき文字と文体として、「両文体」を挙げた。ここまでで、この論文の趣旨は述べ尽くしてあり、第四章以下では、論じ残した点について述べると言う。第三章で、仮名のみの文章が目に見分け難く、目の世界では不便であると述べたが、その理由に詳しく言及していなかったため、第四章では視覚器官の機能、視覚の仕組みを用いて、形字（特にここでは漢字）と仮名文字（すなわちアルファベットや日本語の仮名のような文字）の視覚上の優劣を詳述している。

第五章では、仮名文字と羅馬字(二六)の優劣を論じる。日本の言語を表記する文字としては仮名は羅馬字より優れているが、欧州諸国の言語を表記する文字としては羅馬字より劣る。日本語の音声と欧州諸語の音声とが異なるからである。これは羅馬字論者への牽制のようにも見えるが、本書全体から見ると、羅馬字に対しては仮名文体に対するほど警戒してはいない。音字としてはやはり伝統的に使用されてきた仮名の方が羅馬字より現実的であると見たためであろう。しかし、アルファベットを用いる西欧言語との比較を最後まで貫いて、首

尾一貫した日本語文字論を目指す意図がうかがえる。

VI 「両文体」の姿——第六章 全篇ノ要領及ヒ補遺

第六章は「全篇補遺」と言い、しかも、第三章までですべてこの論文の趣旨は述べ尽くしたと言っているのだが、ここまですべて、特に第二章、第三章で曖昧だった用字の問題以外の文体、文章の構造について、この章で論述を行う。しかし「全篇要領」としつつ、これまでの章で一度も使用されていない新しい用語を持ち出すなど、あまり整理された論になっていないように思われる。

両文体の基礎は雑文体で、その種類を区別することは難しいとしつつ、漢訳体(二九)、洋訳体(三〇)、土語体(三一)の三体に分類している。^(三二) 仮名を省いて文字を顛倒すると正格の漢文になる場合は漢訳体で、語尾を「今語体」(二百三十五丁)に変えたと普通の談話と同じになる場合は土語体にあたると言う。「今語体」とは何か。ここまで一度も出てきていないが、おそらく「口語体」あるいは、口語体様の活用語尾くらいの意味で使用しているのであろう。しかし、重要な点は、龍溪が普通書に使用することを提案しているのは土語体であって、漢訳体ではないとはつきりと述べている点である(二百三十五―二百三十六丁)。すなわち、結局龍溪の主張する「両文体」は、

上述したように語彙レベルで振り仮名付きの漢語を使用するという表記体系に重点をおいたものであり、この第六章を待って初めてはっきりしてくる文体の様相は、談話より簡潔な文語文（「平常ノ談話ヲ古体ノ土語ニ縮メタル者」）（二百三十三丁）なのであった。

おわりに——明治の表現力

ある程度漢字を知る者にとつて、「両文体」を読むことは、対象に応じた一定のテンポで「雑文体」と「仮名体」とに焦点を切り替へつつテクストをたどっていくことであった。^(三三)この意味において、すなわち両文体は仮名体をもその表記システムに内包していることにおいて、仮名文字論、仮名専用論に対し折衷的であつた。また振り仮名付きの新聞などの普及を見た上での極めて現実的な認識があつたと言える。

幕末・明治初年以來、法令や記録、判決文などの公文書にも、右側の通常の振り仮名の他に、左訓としてその漢語の意味や、それに当たる和語を振る表記方式が盛んに行われてきていた。漢字の音と意味を借りて擬態語や英語を漢字で記するという振り仮名の用い方は確かにアクロバティックであるし、^(三四)《黙読二国語性》とも呼び得る、漢文脈と和文脈との間

に平行して作り出される緊張関係は、^(三五)異質言語に対して日本語が持つ消化能力を見せつけるものでもある。この種の表記は明治期の多くの作家に愛用された。二葉亭も逍遙も、また、紅葉を筆頭とする硯友社の作家達も、漱石も、実用性以上に豊かな表現方法を有していた。たとえば紅葉の『量字訓』からは、和語である量語に対して、幾通りもの漢字表記を自ら創出していたことがわかる。そこに並んだ漢字表記には著者紅葉の、あるいは紅葉を代表とする明治の文学人たちの美的造型法を見出だすのだが、これに対しては、「当て字」という格下の評価を含んだ表現を当てることに躊躇しないではない。

こうした、漢字自体の訓み方でなく、ある漢語は和語ではどういふ言葉と対応するか、あるいは逆にある和語にどのような漢字が対応するのかわを示そうとした振り仮名表記と、矢野龍溪の「両文体」はどのような位置関係にあつたのか。これについては、IVで述べたように、龍溪の「両文体」は漢字と仮名の併記を考へていながら漢字・漢語に比重を置くものであつた。したがって両文体の漢字・漢語への振り仮名は、原則として漢語の発音の仕方を仮名で付するものだったのである。

漢字使用の幅にも個人差が相当大きく、振り仮名も漢字からかなり自由な時代があつた。それが、自然主義の作家あた

りから大分今日に近くなるという。^(三七)こうした流れの中で見ると、龍溪の「両文体」の役割はおそらく「假名体」の出現をくいとめるということであり、漢語に振られた字音の振り仮名は、それ以外の訓系統などの読みを讀者から奪っていくことになったと言える。^(三八)振り仮名を含めた漢字平仮名交り文の、現代の表記方法が確立するまでの流れ全体を見た時、明治以後の「国語」教育の中で、漢字は多く用いないように、また幾通りにも読まないようにと細々とマニュアル化されて、言葉はそれが背負ってきた意味の一部と、そして、何よりも大きな歴史を殺ぎ落としてきたことがわかる。おおらかと評してもよい明治人たちの表現力であったが、今日の漢語熟語の仮名表記化やその一部分を仮名書きする表記によつては、もはや遡及不可能なのである。

(二) 谷川恵一「小説のすがた」(『江戸文学』21、一九九九年一月)、三八頁。

(三) 谷川氏同論文によると、漢字カタカナ交り文を使用した小説は、ほとんど振り仮名を付していないものから、総ルビに近いものまで存在し、しかも、しばしば漢字の左右両側にルビを持っていたのに対して、ひらがな交り文で書かれ

た小説のほとんどすべての漢字の右側に振り仮名を添えられるスタイルであったと、その傾向が述べられている。三八頁。

(三) 山本正秀氏『近代文体発生の史的研究』(岩波書店、一九六五年)に詳しい。それによると、慶応二年から昭和二年までの八〇年間は、近代口語体形成、言文一致運動の観点から、七期に分けられ、明治一七年から二二年は、慶応二年から明治一六年までの「発生期」に続く、「第一自覚期」と呼ばれている。ここでは、「かな文言文一致」や「言文一致ローマ字文」の提唱がなされるなどの、国字改良運動とともに、言文一致運動が現れた。新聞紙上にも新しい言文一致が試みられている。また、明治一九年には二葉亭四迷と山田美妙が言文一致体小説に着手している。

(四) 洋本ではあるものの、目録で「頁」ではなく「丁」を用いて表示しているので、本稿ではそれに倣うことにした。

(五) 矢野龍溪『斎武名士／経国美談』(小林智賀平校訂、岩波文庫、一九六九年)に拠った。岩波文庫版では下巻が後編を収めており、その自序に「文體論」(岩波文庫版で下巻、二〇―二五頁)がある。この引用は二二頁より。

(六) 上記岩波文庫版に収められた校訂者小林氏による解題は、『日本文体文字新論』の基礎がこの『経国美談後編』自序中の「文體論」にあるとする。

(七) 矢野龍溪前掲書下巻、二二頁。

(八) 前篇と後篇でその比重は異なる。矢野龍溪前掲書下巻自序、二四頁。前篇ではこれらの四体兼用を決意し、特にその中

でも「俗語俚言體」の一種である日本旧来の「稗史體」を使用しようと勉めたが、不慣れで窮屈であったので、後篇では「自然二任ス」こととして「唯胸中ノ意ヲ寫シ盡スヲ勉メ、別ニ文體ニ拘泥」しなかったと、龍溪は述べている。井田輝敏著『近代日本の思想像——啓蒙主義から超国家主義まで』（法律文化社、一九九一年）ではその二二七頁で、「二種独特の画期的な文体」と評価されている。

(九) 矢野龍溪前掲書下巻自序、二二頁。

(一〇) 子音母音のそれぞれを「音」とし、子音と母音を合わせたものを「聲」と呼んでいる（二二十四丁）。また、二十丁では「シラブル」と左訓を振っている。

(一一) mとnの子音で終わる「聲」のこと（二二十六丁）。

(一二) たとえば「チョク」、「キョク」、「ショウ」、「チャウ」などの「聲」のこと（二二十五丁）。

(一三) 「平聲」とも呼ぶ。子音と母音を一音ずつ合わせた「聲」のこと（九丁）。

(一四) 漢字の「土語」にこのように「クニコトバ」とカタカナで振り仮名を付しているところ（四丁）と、カタカナのみで「クニコトバ」としているところが数カ所ある他は、振り仮名なしの「土語」という表記がほとんどである。

(一五) 「文學」はここでは学問一般を指している。また三十五丁や五十丁では「文學上ノ言語」をすなわち「文語」と置き換えている。第三章で文章を分類する際に用いた「普通書」に対する「文學書」という場合とは「文學」の意味にずれることがある。

(一六) 二十四～二十五丁で、「辞」とは、「聲」が合わさってできた「語」がさらに組み合わせられて「辞」となると説明している。

(一七) 山本氏前掲書、三四四頁以下。

(一八) 龍溪が挙げている諸点は言文一致反対論者の反対理由として常套語化し、龍溪の論は、言文一致ということと明治時代前半の口語の実態との間に横たわる重大事項を明示し、問題点を提出していると述べている（山本氏前掲書、三四八頁）。

(一九) 山本氏前掲書、三四頁以下の各期概観。

(二〇) 「漢文体」、「漢文變體」、「雜文体」、「両文体」、「假名体」の五種。

(二一) 山本氏前掲書は、この「文學書」の文体について、『経国美談』後編自序中の「文体論」と同種でほとんど発展がないと評している。三五四頁参照。

(二二) 明治三年四月、龍溪は『報知異聞／浮城物語』（以下『浮城物語』と略記する）を報知社から出版した。『浮城物語立案の始末』（『国民新聞』と『郵便報知新聞』にそれぞれ同年六月二十八日～七月二日、同日～七月一日に所載）によると、小説に用いるべき「語調」の種類として、「馬琴体」、「徒然草体」、「西書直譯体」、「漢文崩し」の四種をあげ、特に、『浮城物語』には「漢語調」、「漢文崩し」を用いたと言う。しかし自分は漢文崩しの語調だけを後生大事にするのではなく、色々な語体を縦横自在に使用して拘泥することがないのだと述べており、これはまた、『経国美談』

後編自序中の「文體論」で「四體雜用」を標榜していたことにも対応する。文體に關しての用語は必ずしも統一されていないが、『経國美談』後編自序中の「文體論」、『日本文體文字新論』、そして「浮城物語立案の始末」と續けて讀んでいくと、龍溪の「文學書」文體の嗜好は、『日本文體文字新論』第六章の「漢訳體」ではないが漢語を多く用いた漢語調、漢文崩し體であることは明らかである。

(二三) たとは十二・十三丁。

(二四) 「正格ノ漢文」を書けるだけの学力はあつたが、あえて正格漢文を避けて、新知識を広く人々に伝えようとしたと解説されている。八十丁また、百十二丁では今日に伝わっている彼らの文章は夥しく、様々な文體がその中に含まれているとし、雜文體に幾種類かのタイプがあることを窺わせている。

(二五) 「余カ普通書ニ用フ可シト云フハ則チ土語體ノ方ニテ漢譯體ハ極メテ平易ナル者ニアラサレハ之ヲ普通書ニ用ヒサルコソ願ハシケレ」と述べている(二百三十五―二百三十六丁)

(二六) 明治一九年八月、欧米の新聞視察旅行から歸朝すると、龍溪は『郵便報知新聞』の紙面の改良を企てる。當時『讀賣』『朝日』を始めとする小新聞の發展に遭つて、大新聞からの大衆新聞化を明確にした。記事も総ルビ化している。同年一九年九月一六日同紙に「改良意見書」を掲載。その中で「又文體は拙著文字新論の主意に従ひ勉て俗語にて分り易き丁寧なる文字を用ふべし。唯平易なる文章の弊は或は

諧謔或は野卑に流れ易きに在ることなれば、固く注意して右等の弊を避けたく候。又六ヶ數文字には渾てを傍訓を施し、我が新紙を購ふ家は其家の男子のみならず婦女子迄も容易に讀み得るやうに致度候。又紙面に用ゆる文字の數を減少し往く往くは新聞字引をも作り右の字引を用ゆるものは我新紙を讀得ざるものなきにも至らしめ度存候」(本意見書はバラルビだが、一部振り仮名は省略した。句読点は引用者による)と述べている。テクストは西田長壽編『明治新聞人文学集』(明治文学全集91(筑摩書房一九七九年))三―五頁に拠つた。

(二七) 山本氏前掲書、三五五頁。

(二八) アルファベットのこと。ここではアルファベットで日本語を表記する子音+母音で「一聲」をあらわす方法とは別である。

(二九) 「漢文ヲ日本語ニ讀ミ直シタル者」(二百三十三丁)

(三〇) 「洋文ヲ和語ニ讀ミ直シタル者」(二百三十三丁)

(三一) 「平常ノ談話ヲ古体ノ土語ニ縮メタル者」(二百三十三丁)

(三二) ここで龍溪がロシア人によるポーランド侵攻の物語の一場面を讀者の参考のために、それぞれ洋訳體と土語體で書き分けているのは興味深い。

(三三) 谷川氏前掲論文、四〇頁。

(三四) 十川信介『「浮雲」の時代』(明治文学 ことばの位相』(岩波書店、二〇〇四年)、九頁。

(三五) 由良君美「ルビの美学」(『言語文化のフロンティア』(講談社学術文庫、一九八六年)、一〇七頁以下参照。

(三六)

『紅葉全集』第12卷（岩波書店、一九九五年）所収。一種の自家用当て字集成。空欄も多数あり、著述活動を行う上で必要になったものから順に記入していったのかもしれない。また紅葉の『金色夜叉』には、生前に紅葉自身が校訂に関与したとされる博文館版の全集で、漢語に当てる和語を新聞初出とは別の語に差し替えた例がある。「地動波動」に初出「ばたばた」と振られていた振り仮名は博文館版の全集で「ぢたばた」と改変されている。振り仮名が漢字からかなり自由で、漢語の視覚的な効果が認められ、利用された例である。

(三七)

池上禎造「漢語流行の一時期」〔『漢語研究の構想』（岩波書店、一九八四年）、五八頁。

(三八)

谷川氏前掲論文、四六頁。しかし、谷川氏は龍溪がそのように名づけたという「両文体」の漢字に付された振り仮名の種類について、必ずしも厳密でない。谷川氏は、意味や和語による振り仮名をも含めているようだが、龍溪の「両文体」は彼の『日本文体文字新論』での論の展開からみて、字音による振り仮名を想定している。